

園の取り組み事例

林間のぞみ幼稚園（神奈川県・私営）

絵本と出合う環境の中で 保育者との絆を深め、 子どもの内面の成長を支える

取り組みの
ポイント

- 絵本や紙芝居の蔵書を少しづつ増やし、地域の公立図書館の団体貸出制度も利用しながら、日常的にお話を触れられる環境を整備。
- 園での絵本の貸し出しや、保護者を含めた多様な人による読み聞かせを実施し、家庭とともに子どもがお話を親しむさまざまな機会を提供。

お話を出合う環境を整えて、豊かな時間を生み出す

子どもと保育者の絆づくりとして
絵本を位置づける

神奈川県相模原市にある林間のぞみ幼稚園では、子どもの興味や、「やりたい」という思いから始まる遊びや活動を軸に主体性の発揮を促すことで、「子どもが自ら育つ力」を伸ばす保育を実践しています。そうした理念のもと、保育者は子どもに丁寧に寄り添い、一人ひとりをリスペクトして認め、自尊感情を高めながら、同時に人は頼れるものだという信頼感を育みます。初めに子どもと保育者との間に強い絆をつくることで、子どもは友だちとも関係を築けるようになり、3年をかけて集団ができ上がっていきと考えています。園長の藤本吉伸先生は、次のように思いを語ります。

「私たちがめざすのは、“豆腐”のように枠にはめられ、きれいに形が整えられた集団ではなく、“納豆”的に一粒一粒が際だちながら、仲間としてつながり合える集団です。その根幹を成す子どもと保育者との絆は、子どもが保育者の温もりや人間味を感じることで深まっていきます。そこにお話が大きな



園長
ふじもとよしのぶ
藤本吉伸 先生



副園長
はらだいち
原大智 先生



事務（絵本担当）
あらきみよ
荒井弥生 先生

お話ししてくださった先生方

役割を果たすと考えているので、私たちは絵本や紙芝居、素話を大切にしているのです」

同園では、約50年前から「のぞみ文庫」という絵本の部屋を設け、絵本を身近な存在として扱ってきました。「のぞみ文庫」には約3,000冊の蔵書があり、さらに職員室に約1,000冊がストックされて、各クラスにも季節や活動に合う絵本、人気の絵本などが置かれています。年に1回は棚卸しをして、あまり読まれなくなった絵本などを整理しながら、新



規の絵本を隨時追加。絵本の費用は、年度の最初に予算を確保し、保育者からのリクエストも踏まえて新刊本や中古本を購入しています。選書にあたっては、「子どもが楽しめそう」「大人が読んでも面白い」「心を動かされるストーリーがある」といった視点を重視しています。

また、地域の公立図書館の団体貸出制度も利用。年に2回、紙芝居と合わせてそれぞれ200冊の絵本を借りることで、子どもたちに幅広い絵本と出合う機会を提供しています。絵本の管理を担当する荒井みお先生は、図書館を利用するよさを次のように説明します。

「園の予算には限りがある中で、図書館の利用で絵本の数や種類を充実させ、子どもの興味・関心に幅広く応えています。さらに、保育者が新しい絵本を知るきっかけになり、園としてどんな絵本を購入

すべきかを考える際のヒントにもなっています」

図書館での選書や、園での絵本の棚卸しなどは、司書的な業務に携わる「文庫委員」（保護者ボランティア）を編成し、その方々の協力を得て、保育者の負担軽減を図っています。特に選書は、園の要望を伝えつつも基本的に文庫委員に任せており、新たな視点が加わることで多様な絵本と出合える環境づくりにつながっているといいます。

毎週の絵本の貸し出しで 家庭でも絵本と触れ合う時間を楽しむ

同園では、日常の遊びや生活の中にごく自然に絵本を取り入れています。毎日、朝や帰りの会には「おはなしタイム」を設け、担任の保育者が子どもたちに絵本や紙芝居を読んでいます。何を読むか、いつ読むか、何回読むかは保育者の自由。絵本に限らず同園では、「子どもたちをよく理解している担任の保育者が、それがより子どもたちのものになるように保育をしてほしい」という藤本園長の方針に基づき、クラスごとに個性豊かな保育が展開されています。

保育者は絵本を読むとき、子ども一人ひとりに思いを届けるように語りかけ、目を合わせ、その反応に寄り添います。子どもがその絵本の特性をより楽しめるように、環境と場や距離にも配慮します。また、身を寄せたり、膝に乗せたりしながら少人数の子どもに読む活動も大切にしています。そうしたかかわりは、物語を楽しみながら、子どもの心に保育者に読んでもらったという温もりの感触を残す、大切なひとときだと考えています。

子どもたちが絵本と触れ合う機会の1つが、「ぶんこのじかん」と呼ばれる、のぞみ文庫での絵本・紙芝居の貸し出しです。週1回、クラスごとに10分間、1人あたり2冊まで借りられるしくみで、貸し出しカードの記入などは文庫委員にお願いしています。お気に入りのものを毎回借りる子もいれば、絵の雰囲気にひかれて手に取る子など、子どもたちの選び方はさまざま。自分の「好き」を見つける時間にもなっています。

「中には借りる絵本が決まらない子もいて、保育

者や文庫委員が時間を超過して『この絵本はどう?』と、お勧めの絵本を紹介することもあります。その子その子が今どんなことに興味があるのか、わかる機会にもなっています」(荒井先生)

借りたものは家に持ち帰れるよう、保護者には大型絵本や紙芝居が入るサイズの布袋を用意してもらっています。子どもが自分で選んだものを大好きな人に読んでもらうことで、大事にされ、愛されていることが伝わっていくと考えています。

絵本の世界を楽しみながら さまざまな人とのつながりを育んでいく

年中と年少クラス、未就園児を中心に、月3回の金曜日に「えほんのむし」という取り組みも行っています。以前はのぞみ文庫を開けておき、自由にやって来る子どもに文庫委員が絵本を読んでいましたが、今年度からは、卒園生の子どもをもつ木版絵本作家のもりといづみさんがこの活動を担っています。週ごとに年齢を決めて各クラスを訪れ、もりと

さんと荒井先生が3冊ほどの絵本や紙芝居を読んでいます。活動終了後には約30分間、もりさんは「アトリエ」と呼ばれる工作物や水槽、絵本などが置かれた部屋に移動し、もっと絵本を読んでほしい子や紙芝居を自分で操作したい子、年長クラスの子などを受け入れています。

「子どもが好きな絵本だけでなく、子どもに伝えたい絵本を読む機会にするため、スタイルを変えました。移動紙芝居屋さんのような雰囲気で、『絵本の時間だよ』と声をかけると、子どもたちはうれしそうに集まっています。特にルールは決めておらず、年齢やクラスによって雰囲気も違いますが、読み始めるとどの子も自然と集中して耳を傾けてくれます。普段読んでいる保育者とは読み方や選書が異なることも、楽しさにつながっているようです」(荒井先生)

このほかにも、年に3、4回、藤本園長が学年ごとに素話中心の「おはなし会」を開くなど、さまざまな人の語りを通して、お話を触れる機会をつくっています。

絵本をきっかけとして、豊かな遊びや活動が生まれる

絵本から芽生えた興味を 日々の保育につなげていく

絵本を通じて子どもの内面が育まれることで、日々の遊びや活動にも広がりが生まれています。例えば、絵本を見て文字に興味をもち、覚えようとする子もいます。その際、園では、自分で絵本を読みたい、あるいはだれかに手紙を書きたいなど、子どもが必要性を感じる気持ちに基づく行動であることを重視しながら、サポートをしています。

また、絵本からインスピレーションを得て「ごっこ遊び」や物作りが始まったり、劇活動のテーマを発想したりすることも少なくありません。副園長の原大智先生は、子どもたちが絵本の世界に触れる中で、想像する力や表現する力が無理なく育まれると話します。

「絵本は、子どもが出会うもっとも身近なアート

の1つ。日常とは異なる視点を投げかけてくれ、その世界に誘います。子どもたちはスッとその世界に入って心を躍らせます」

子どもたちの主体性を尊重した保育を展開する中で、絵本から生まれた興味・関心を掘り下げるケースも多いといいます。例えば、子どもたちが『エルマーのぼうけん』(ルース・スタイルス・ガネット作、福音館書店)を読み、その世界を作つてみたいという思いが生まれ、創作活動へと発展したがありました。その動きはやがて学年全体に広がり、大きな活動へと育つといったといいます。

「一人ひとりのやりたいことが異なる場合もありますが、どうしたらみんなが納得して楽しめるか、おのずと子どもたちで話し合いを始めます。正解のないことに対して、いろいろな人の気持ちを受け止めながら話し合っています。ときには、いくつかのアイデアをくっつけて、新たなものを創造すること

ぶんこのじかん

毎週、各クラスの子どもたちが好きな絵本を2冊ずつ借りる時間。貸し出し手続きなどは文庫委員が行います。絵本を受け取った子どもが、その場に座って夢中で読み始める姿も見られます。



えほんのむし

保育者以外の大人を通して絵本の世界に触れる、特別な時間。自由に座った子どもたちは、次第に絵本や紙芝居の世界に引き込まれていきます。



もあります」（原先生）

年長クラスのお泊まり会では、事前にみんなで『きょうりゅうえんち』（やましたこうへい作、ポプラ社）を読みました。それをモチーフに、恐竜だらけの遊園地から招待状が届いたという設定でお泊まり会を開始。子どもたちはワクワクと期待感をもって参加し、仲間と協力して大きな恐竜の絵を描いたり、物語に登場する場面に見立てた遊びを楽しんだりしました。お泊まり会が終わった後も、「恐竜遊園地の園長先生」との手紙のやり取りを続け、物語の世界を現実の遊びの中で広げていくような活動が展開されました。

絵本で心を通わせる経験が 懐かしく温かな記憶となる

同園では、保育者が長く働き続けることで保育の連続性が保たれ、理想の保育の実現につながるとい

林間のぞみ
幼稚園

「みんなが愛情を注ぎ育てる」を保育理念に掲げる。子どもがもつ「100の自ら育つ力」を伸ばすことをめざし、少人数のクラス編成により、人・もの・ことのかかわりを広げていく保育を実践している。

○園長：藤本吉伸先生
○所在地：神奈川県相模原市南区東林間6-5-2
○園児数：125人

う考えから、子育てなどで現場からいったん離れた保育者を積極的に迎え入れています。そのため、保育歴30～40年のベテランの保育者が多く在籍しています。こうしたベテランの保育者による味のある絵本やお話の時間は、子どもたちにとってじっくり楽しめるひとときになるのと同時に、若い保育者にとっても、語りかけの工夫や雰囲気づくりなど、多くの学びを得る機会になっています。

そして、保育後の時間を使って、保育者はほかの保育者の実践についての気づきを話し合い、自身の実践に生かすようにしています。その積み重ねが、子どもたちの豊かな育ちにつながっています。

「いつも自分が受け入れられ、安心して過ごせる環境というのは、たとえるなら、毎日おいしい湧き水を口にしているようなものだと思います。仲間とともに過ごした温もりや楽しかった感触が、地下水のように少しづつ心の奥底にたまっていく。卒園後も、ふとしたときに思い出されるような懐かしくて温かな記憶を、子どもたち一人ひとりが心の奥に宿してほしいと願っています。このような感覚を育んでいく取り組みの1つとして、これからも絵本やお話の時間を大切にしたいと考えています」（藤本園長）